

小宮山天香の蔵書処分

朝倉 治彦

当館に、小宮山天香の日記がある。内容は明治四〇年から大正二年まで、三十一冊（うち四冊雑抄）である。これ以前の日記は、柳田泉氏が所蔵されていたが、戦災で焼失したと聞いている。当館の日記については、先年なくなられた木戸清平君の紹介が、唯一ではなからうか。朝日新聞の社史編集室の清水三郎氏は、『新聞研究』に、晩年の天香について一文を寄せているが、当時、この日記の存在を御存知なかったらしい。

天香、小宮山桂介は、水戸の儒者小宮山楓軒の孫、南梁の弟として、安政二年に大洗の磯浜で生れたから、明治四〇年は、満五十四歳にあたる。三十八年に東京朝日新聞社を退いて以後は、社会に出ず、赤坂仲之町の武田桜桃の邸内にある借家で、自適の生活を送ったのであるが、その頃のことについては、新聞記者時代に天香の世話をうけた岡田翠雨の回顧録（『ひむろ』昭和五、六年に連載）には、ほとんど記されてなく、清水氏の調査によ

って、かなり判明している。

三十四年から、自宅で行なっていた作歌指導についての記事は、日記中に散見しており、杉浦重剛は、弟子の一人であったので、詠草の添削を受けていることが記されている。日記に登場している名の知れた人物若干をあげると、半井桃水、小田久太郎、岸上質軒、増田于信、武田桜桃、篠田鋌造、池辺義象、岡田翠雨、三上参次などである。親族で屢々訪れているのは甥の昌紀である。このうち半井桃水は、作家としてより、むしろ樋口一葉との関係で知られた人で、桃水からの紹介で、一葉が天香を訪れていることは、一葉の日記に見えるが、惜しいかな天香の日記に、当時の箇所は失われている。

二

明治四十一年度の『帝国図書館年報』図書及閲覧人の項に

和漢書増加中ニハ水戸ノ碩学小宮山楓軒父子ノ自筆著書数万冊アリ、其多クハ大日本史編纂事業ニ関渉スル者ナリ

とあるが、これは小宮山天香よりの購入である。

天香と、帝国図書館の鹿島則泰との間に行われた交渉は、日記に檢すると、四十一年七月十四日に鹿島氏を館

に訪ねているのが初見で、納入後も交渉が続いており、当館所蔵日記最後の大正二年まで、関連記事が絶えていない。当時の文書記録を調べてみないと判明しないが、楓軒、南梁の遺稿以外にも、当館に納めているのではあるまいか。なお、天香が、楓軒、南梁の遺書を架蔵するに至ったのは、南梁没後である。

本誌七号に報告された、静嘉堂文庫所蔵の小宮山楓軒叢書は、楓軒の編著は少ない。小宮山家から直接入ったのか、古書店を通っているのか、丸山氏の報告では明らかでないが、日記中には岩崎文庫、文行堂などの名も見える。

慶応義塾大学には、高橋箒庵が持っていた『楓軒稿』が、大阪大学には『楓軒文稿』が、また内閣文庫には『楓軒文書纂』があることなどから推測すると、晩年における書籍の売り喰いということが、思い合わされる。茨城県立図書館にある、楓軒、南梁の蔵書目録について検討することも、今後必要であろう。

当館所蔵の日記は、昭和九年の購求であるから、天香没後の流出であろう。天香の最後を世話したのは、昌紀であった。

(補) 日記内容の年月

第一冊 明治四〇年一月一日―五月十五日。第二冊

五月十六日―十月九日。第三冊 十月十日―明治四一年二月十日。第四冊 明治四一年二月十一日―六月三十日。第五冊 七月一日―八月七日。第六冊 八月八日―九月十五日(以上六冊、小横本、第一帙)。
第七冊 九月十六日―十一月三十日。第八冊 十二月一日―明治四二年二月二日。第九冊 二月四日―四月十五日。第十冊 四月十六日―六月三十日。第十一冊 七月一日―九月十四日。第十二冊 九月十五日―十二月十一日。第十三冊 十二月十一日―明治四三年二月廿八日。第十四冊 二月一日―五月十五日。第十五冊 五月十六日―七月三十日。第十六冊 八月一日―十月十五日。第十七冊 十月十六日―十二月三十一日。第十八冊 明治四四年一月一日―三月十四日。第十九冊 三月十五日―五月三十一日(第二帙)。
第二〇冊 六月一日―八月十五日。第二一冊 八月十六日―十月卅一日。第二二冊 十一月一日―四五年一月十一日。第二三冊 一月十二日―三月十二日。第二四冊 三月十三日―八月十四日。第二五冊 八月十五日―十二月三十一日。第二六冊 大正二年一月一日―三月三十一日。第二七冊 四月一日―八月十四日。

(あさくらはるひこ) 一般参考課主査)